

# 粗供養

Memorial gifts



- ◆写真の商品以外にも各種ご用意しております。
- ◆年忌表は P18 に記載されております。



お通夜・ご葬儀・ご法要などの粗供養として  
御会葬の皆様にご心をお込め。  
感謝の気持ちが伝わるお品を多彩にご用意しております。

<p><b>会葬御礼</b></p>	<p>宗教儀礼的な意味は、亡くなった人の罪業を減らして無事成仏できるよう、喪主が参列者に布施をして、その徳を死者に振り向けるためのものです。 会葬御礼は香典の有無に関わらず、通夜・葬儀に御参列下さったことに対する御礼として手渡します。</p>
<p><b>香典返し</b></p>	<p>香典の「香」は「香り」、「典」は「すすめる」という意味で、故人の冥福を祈って仏前（霊前）に供える六種供養の中の「香」を意味しますが、時代とともに香の代わりにお金を用いるようになりました。 その香典に対する返礼の気持ちを形に加えて手渡すのが粗供養（志）になります。 地域によって返礼の額に開きがありますが、一般的には「半返し」です。</p>
<p><b>香典返しの時期</b></p>	<p>■仏式の場合 お返しの時期は、全国的に四十九日法要後にまとめて発送されることが多いようです。四十九日（七七日）の忌明け法要を営むまでは「忌中・喪中」の期間であり、喪に服している間はお礼や香典返しは慎むのが本来の礼法になかった答礼といえます。 ただし、最近では会社関係でまとめていただいた場合のごく簡単なお礼品や、葬儀でお手伝いいただいた方へなるべく早くお礼をしたい場合は、香典返しとは別に葬儀後ほどなく商品をお贈りされる方もおられます。 なお、滋賀県湖東地域では葬儀当日に香典返しを渡すのが一般的です。</p> <p>■キリスト教の場合 香典返しは日本独自のしきたりで、キリスト教には本来「香典返し」という習慣はありませんが、時期としては三十日祭の召天記念日後にお贈りされるケースが多いようです。</p> <p>■神式の場合 神式の忌明けに相当するのは五十日祭です。香典返しはもともと仏式のしきたりですが、やはり仏式に準じた形でお贈りされています。</p>
<p><b>満中陰・忌明けの粗供養（志） 回忌法要・法事の粗供養（志）</b></p>	<p>忌明けの四十九日の法事後に香典返しとしてお贈りする場合は、関西では「満中陰志」が使われることが多いようです。その他の地域では、忌明けの意味として、故人の戒名を書き「忌明志」を用いる地域もあります。また、法事の際に御仏前等をいただいた方へ「粗供養」として贈ることもあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・葬儀の際に香典をいただいた方へ、 「満中陰」にお渡しする意味合いで贈る「満中陰志」</li> <li>・四十九日法事の際に御仏前などをいただいた方へ、 「お忙しい中をお越しいただきありがとうございます」という意味を含めて、法事のお返しとしてお渡しする「粗供養」</li> </ul> <p>「満中陰志」として贈るのは四十九日法事のみ、それ以降の一周忌法要（法事）、三回忌法要（法事）、七回忌法要（法事）などの年回忌の引き出物は「粗供養（主に西日本）」・「志（主に東日本）」として贈ると考えるとわかりやすいかもしれません。</p>

※香典というのはもともと相互扶助の精神から生まれたもので、香典返しは日本独自の贈答文化といえます。この精神をきちんと理解せずに香典を辞退するというのは、他人との交流を遮断するという他者排除にもつながっていきと考えられます。よほどの事情がない限りは香典の辞退は避けるべきではないでしょうか。